

GCOE 国際会議出席報告書 (外国旅費用)

拠点リーダー 川合 光 殿

(ふりがな) 氏 名	みつたに かずや	所属・職名	指導教員名 (院生の場合)
	三ツ谷 和也	原子核理論・博士課程3年	国広 悌二
Tel,Fax e-mail	Tel 075(753)3872 E-mail:kaz_mit@ruby.scphys.kyoto-u.ac.jp		
発表題名	A possible quasi-particle picture of the quark near T_c and its effect on the dilepton production rate		
著者名	Kazuya Mitsutani, Masakiyo Kitazawa and Teiji Kunihiro		
会議名称 ・開催期間	The QCD Critical Point 自 2008年7月28日 ~ 至 2008年8月22日		
開催地 (国、市)	アメリカ合衆国、シアトル		
出張期間	自 2008年8月17日 ~ 至 2008年8月24日		
国別参加者数	中国3、フランス1、ドイツ14、インド1、イタリア3、日本8、ロシア2、アメリカ20		
<p>発表内容、聴衆の反応、質疑応答、その他について簡潔に記述してください。</p> <p>上記の発表題目で、これまで我々が行ってきたカイラル相転移の臨界点近傍におけるクォーク準粒子描像の研究とそれを考慮した時のレプトン対生成率の計算結果について発表した。</p> <p>発表形式は午前中に申請者のみが話すと言うものであり時間的制約がほとんどなかったため、途中適宜質問を受けたりそれから派生して議論をしたりしながら発表を進めた。その結果全体で55分ほどの発表となった。</p> <p>質疑応答においては、本研究の意図はクォークの情報という非観測量をレプトン対生成率という観測量につなげるということであるが、「結果は興味深いが実際の観測においては本研究で扱ったような理想的状況のみでなくそれ以外の状況との総和が観測されるため見えにくくなるのではないだろうか」という趣旨の指摘がなされた。また、関連する研究の紹介も受けた。</p> <p>午後には午前中のトークに関連した議論がなされ、主に我々がレプトン対生成率からどのような情報を得ることができるかということが議論された。</p>			